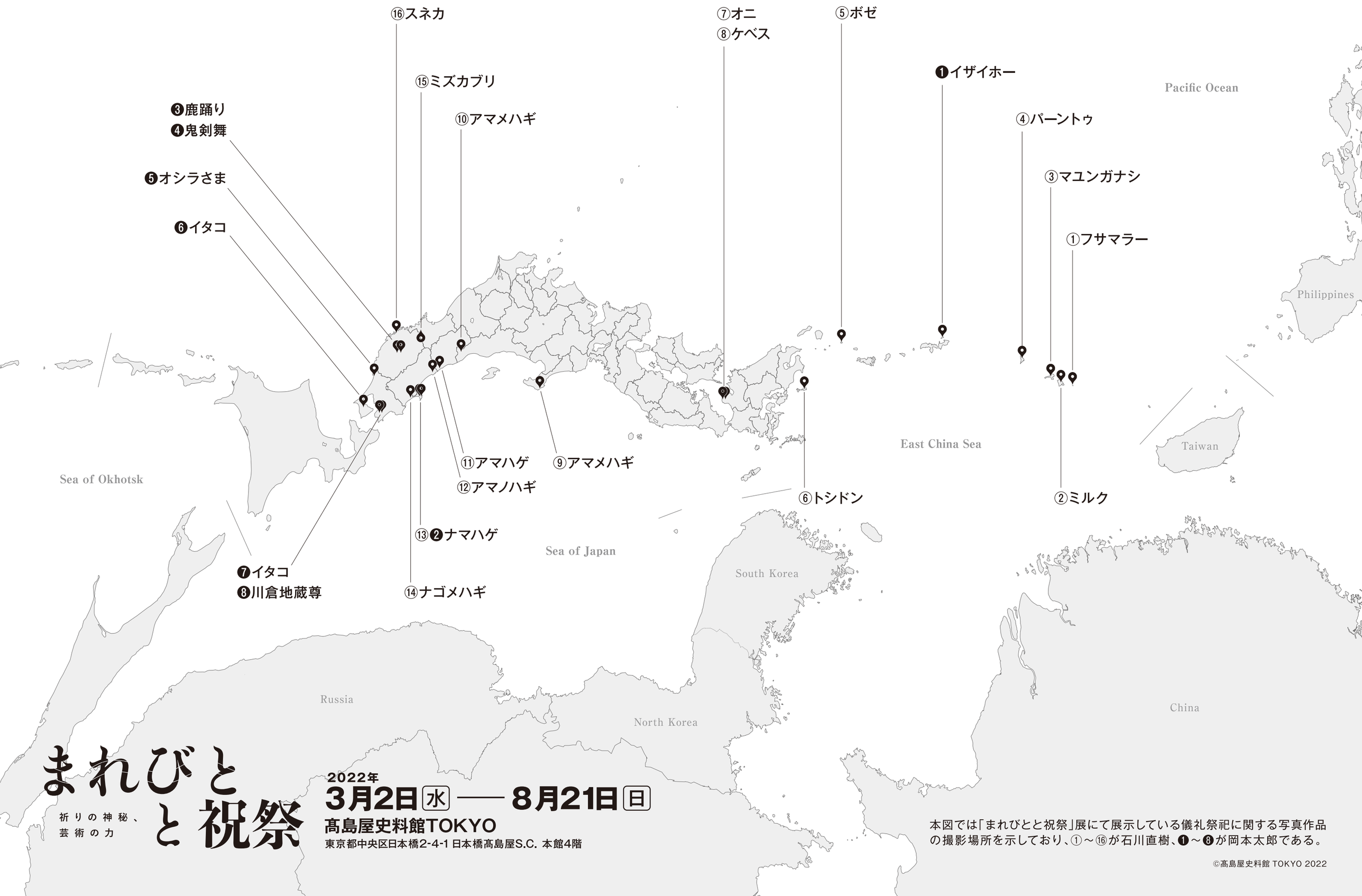

本図では「まれびとと祝祭」展にて展示している儀礼祭祀に関する写真作品の撮影場所を示しており、①～⑯が石川直樹、❶～❽が岡本太郎である。

©髙島屋史料館 TOKYO 2022

①フサマラー〈沖縄県八重山郡竹富町波照間島〉

旧暦7月14日お盆中日に行われる。波照間島では、かねてより水が大変貴重とされてきた。フサマラーは雨降らしの神とされ、かつて雨乞いの行事アメニゲーに現れたが、現在では豊穣祈願やお盆の祖先供養を目的としたムシャーマ儀式の仮装行列に登場する。
ちなみに八重山地域では、フサマラーはじめ、ミルク、アンガマなど仮面来訪神信仰が顕著だと指摘されている。

②ミルク〈沖縄県八重山郡竹富町西表島祖納〉

農耕暦の正月（旧暦10月前後）にあたる節祭で、3日間にわたり、収穫への感謝と翌年への豊穣祈願が行われる。1日目は大晦日、2日目は「世乞い」という新年の祝いで最も賑やかになる。黄色い衣装を着た中年男性が人前で仮面（布袋の顔と酷似）をつけてミルク（弥勒）神となる。その後ミルク神を先頭に集落を練り歩き、浜辺では舟漕ぎの演舞などが奉納される。

③マユンガナシ〈沖縄県石垣市石垣島川平〉

旧暦9月の来訪神行事で、節祭の一部とされる。マユンガナシがムトゥ（本神）と補佐役トゥム（供神）で二神一組となって家々をまわり、神詞（かんふつ）を唱えて五穀豊穣・家内繁盛などを祈る。マユンガナシは神なので、人間の言葉は話さない。この行事は、かつて村人に一夜の宿を乞うた旅人が神であった（多くの人が断る中、快く泊めたのが一番貧しい家の主人で後にその家が繁盛した）という言い伝えに由来する。

④パーントゥ〈沖縄県宮古島市平良島尻〉

旧暦9月の泥を塗る奇祭。仮面を被り頭にはススキの呪具を、そして体にはつる草を巻きつけて、体中に井戸に沈殿した強烈な異臭を放つ泥を塗りたくったパーントゥ3体が、神聖な井戸ンマリガーに現れる。パーントゥは3ヶ所の拝所をまわってから集落を訪れ、容赦なく人々に、時には車にも泥を塗りたくる。無病息災や厄除けの意味を持つとされる。

⑤ボゼ〈鹿児島県十島村悪石島〉

お盆の最後、旧暦7月16日夕刻の来訪神行事。異形の面をかぶり、体にはビロウの葉を巻き、手には男根を模した棒ボゼマラを持つボゼ3体が、聖地とされるテラから盆踊りで村人が集う広場に現れ、女性や子どもたちを追いかけまわす。悪魔祓いとも言われる儀礼だが、ボゼマラにつけた赤い泥を擦り付けることで、邪気を追い祓うとともに幸せをもたらすとされる。かつてのボゼは、瘤が大きく垂れてもっと恐ろしい顔立ちだったという。

⑥トシドン〈鹿児島県薩摩川内市下甑島〉

大晦日の夜の来訪神行事。青年たちが鼻の長い仮面や、シュロやソテツのマントでトシドンとなり、集落の3～9歳の子どもたちがいる家を3体で訪問する。子どもたちの悪い行いを戒める一方で、良いことは褒めて元気づけ、新しい年への誓いを立てさせる。最後には、トシドンが子どもに褒美として年餅を与えることで、無事に年を重ねられる（成長できる）と言い伝えられている。

⑦オニ〈大分県国東半島〉

無病息災、五穀豊穣を祈願する修正鬼会（しゅじょうおにえ）で、神仏習合が色濃い行事。3つの寺が舞台だが、天念寺の修正鬼会は毎年、成仏寺と岩戸寺は1年交代で開催される。厳しい修行を積んだ僧侶が、不思議な力を持つ憧れの鬼に扮するが、その鬼は仏の化身（災払鬼は愛染明王、荒鬼は不動明王、鎮鬼は千手観音）とされる。松明の炎で人々を叩くことで幸せをもたらすが、体を縛る縄には、強すぎる鬼の力を抑え込む意味があるという。

⑧ケベス〈大分県国東半島〉

ケベス祭りは毎年10月14日に櫛来（くしく）社で開催される由来不明の火祭りで、ケベスとトウバが火を巡って争う奇祭。ケベスは火に突進しようとし、トウバはそれを阻止しようとするが、最終的にはケベスがその攻防を制す。祭りが最高潮に達すると、ケベスとトウバは火を持って観客めがけて境内を駆けまわる。五穀豊穣を祈るとともに、飛び散る火の粉をかぶると無病息災のご利益があるとされる。

⑨アマメハギ〈石川県輪島市門前町皆月〉

1月2日に行う正月の伝統行事。天狗や猿の仮面をつけた来訪神が忌中を除いた家々を訪れて、子供の怠惰を叱り戒め、さらには各家庭の災厄を祓い、幸福をもたらすとされる。ところで能登は、「まれびと」という概念を提唱した民俗学者折口信夫とも縁が深い地だ。折口の門弟であり養子となった藤井春洋（はるみ）の出身地である能登半島の羽咋（はくい）市には、二人が眠る墓がある。

⑩アマメハギ〈新潟県村上市大栗田〉

毎年小正月の夜に行われてきた豊作を祈る儀礼。過疎化により、青年から引き継いだ子どもたちが獅子や天狗、狐の面をつけて「アーマメ はんぎましょ」と唱えながら、怠け者の印とされる火だこをおろし金で剥ぐ仕草をしながら家々をまわる。2002年に一度途切れるも、保存会が立ち上がり復活したが、継承者が減り2015年1月が最後の行事となった。

⑪アマハゲ〈山形県飽海郡遊佐町吹浦女鹿〉

正月に、藁を重ねたケンダンという蓑をまとい、仮面をつけた神が家々を訪ね、怠け心を諌め、健康祈願する来訪神行事。アマハゲが立ち去った後に残された藁にはご利益があるとされる。寒い冬に囲炉裏にばかりあたって赤い火だこができるような怠け者を戒める意味があり（火だこを方言で「アマミ」「アマメ」「ナモミ」などとよび、これを剥ぐ意）、災厄を祓い、幸福を招く男鹿半島のナマハゲと同系統のものと考えられている。

⑫アマノハギ〈秋田県にかほ市象潟町小滝石名坂〉

小正月の1月15日に行われるナマハゲに似た来訪神行事。昼間に「小屋焼き・鳥追い」という行事で穢（けが）れを祓う。夜には仮面をかぶり、ケラとハバキ（藁製の防寒具と脛あて）を身に着け、模造のマサカリを手にしたアマノハギ3体が、各家々をまわる。最近では騒がず脅さないアマノハギの「草食化」「優しい鬼化」が指摘されている。継承者減少に加え、アマノハギを迎える家側も年配者が多く、子どもがいても「怖がらせないで欲しい」という要望もあるという。

⑬❷ナマハゲ〈秋田県男鹿半島〉

全国的によく知られる大晦日夜の来訪神行事。かつては小正月に行われたが、現在は12月31日に行われている。ナマハゲは神々の使者とされ、「怠け者はいねが～、泣く子はいねが～」と各家庭をまわり、大人と子どもの悪事を戒め、災厄を祓うと共に、幸せをもたらすとされている。このナマハゲが広く知られるようになった背景には、柳田國男と折口信夫という二人の民俗学者の影響が極めて大きい。

⑭ナゴメハギ〈秋田県能代市浅内〉

ナマハゲやアマノハギなどとの共通点が多い来訪神行事で、小正月行事だったが、現在では大晦日の夜に行われる。浅内では番学（山伏が行っていた神楽の一種）の面をつけるのが特徴的で、ケラ（藁製の防寒着）を着て山の神となる。そして模造した包丁やマサカリを携えたナゴメハギは、鈴を鳴らし家々を訪ねる。子どもや大人に怠惰を改めるよう戒めるとともに、家人の厄祓いをして祝福を与えるとされる。家人はご馳走を用意してナゴメハギをもてなす。

⑮ミズカブリ〈宮城県登米市東和町米川〉

毎年2月初午に行われる祭祀。裸にしめ縄と藁装束を身につけて顔にすみを塗った男性たちは、神の使いとなり、南から北へと家々にバケツの水をかけて火伏せ祈願を行う。装束の藁を抜いて屋根の上に置いておくと火伏せ守りになるとされ、祭りの見学者たちは、ミズカブリ一行がまとう装束の藁を引き抜いていく。

⑯スネカ〈岩手県大船渡市三陸町吉浜〉

小正月の1月15日に鬼のような面をつけ、腰にアワビの殻をぶら下げたスネカが現れる、ナマハゲに似た来訪神行事。スネカは「スネカワタグリ」の略で、アマメハギやアマハギなど同様に、怠けて脛皮（スネカワ）にできた火だこをタクル（剥ぐ）の意があるという。新年の訪れに怠惰を戒め、子どもたちの健やかな成長を願うとともに、豊漁や五穀豊穣を祈願する儀式である。

❶イザイホー〈沖縄県久高島〉

久高島では三十から七十までの女性は全て神事に参加しなければならない。そして十二年に一回、午の年に、新しいナンチュ（神人）を資格づける厳粛な儀式が行われる。（中略）
橋渡りは祭りの最高潮で、女たちは極度に緊張して真青になるそうだ。これによって、人間の女から、ナンチュに変身する。つまりこれは神聖なイニシエーションの儀式なのだ。このとき、不貞をおかしたり、不身持だった女がその中にいれば、橋をころげ落ち、血を吐いて死んでしまうと言い伝えられている。

岡本太郎「神と木と石」『沖縄文化論』

❸鹿踊り〈岩手県花巻温泉〉

生活のためにそれを殺し、肉を食う。獲物を豊かに得るための呪術であり、またその霊に対する感謝、慰撫。そしてまた食べられてくれという願いをこめての、当然の儀式である。狩猟民族の面目がここにある。だから中央文化や仏教の以前、山と山の間にはさまれ、狭い世界に自然と格闘しながら生きていた時代の原始宗教の名残りに違いない。

岡本太郎「岩手」『日本再発見 芸術風土記』1957年

❹鬼剣舞〈岩手県花巻温泉〉

鬼剣舞はこれ（鹿踊り）にくらべればずっと時代は新しい。念仏踊りの系統を思わせるが、スポーティで歯切れのよい妙技だ。

岡本太郎「岩手」『日本再発見 芸術風土記』1957年

❺オシラさま〈青森県八戸〉

「おしらさま」の信仰は東北全体にわたっている。オシラは蚕のことで、養蚕の神さまだといわれているが、実はもっと古い信仰のように思われる。たいていは村の草分けのような旧家に、いつからとも知れずまつられている。

岡本太郎「オシラの魂」『神秘日本』1964年

❻イタコ〈青森県恐山〉

この山全体が地獄・極楽の民主的イマジネーションの不思議な舞台になっている。仏教的因果のヴェールをかぶってはいるが、その底にははるか古代からの、死霊の山としての信仰がある。（中略）
それにしてもなんとニギヤカなことだろう。こういう互いに関係のない宗教、信仰が勝手に集まってきて、それぞれ強弱さまざまのニュアンスで生きている。

岡本太郎「オシラの魂」『神秘日本』1964年

❼イタコ〈青森県川倉〉

仏おろしは、膨大な祭文からはじまるのだが、この厳密な儀礼の後、霊が出現してからが興味がある。
死んだ夫や息子、親兄弟、さまざまの仏が、入神したイタコの口をかりて語りかけ、あの世の様子を知らせ、また教訓をたれたり、予言までする。独特の、歌うような節まわし、しかも方言なので、聞いていてもところどころしか解らない。

岡本太郎「オシラの魂」『神秘日本』1964年

❽川倉地蔵尊〈青森県川倉〉

一足、お堂の内部に足をふみ入れて、私はアッと声をあげてしまった。そんなに広くない堂内だが、お燈明に照し出されて、びっしりと、大小色とりどり、数限りない地蔵さまが並べたてられ、積み上げられているのだ。（中略）
お地蔵さまはお堂の中に一万体以上ある。亡くした子供とか、死んだ人の写真を持って行って、石屋に彫ってもらい、その土地土地から背負ってきて奉納するのだ。

岡本太郎「オシラの魂」『神秘日本』1964年

＊本図・資料作成にあたっては、主に以下を参考にさせていただきました。

宮田登「沖縄のミルク神」『民族学研究36巻3号』（日本文化人類学会、1971年）、比嘉康雄『神々の古層4・5・6』（1990～1992年、ニライ社）、比嘉康雄「琉球列島の草莊神」『自然と文化』（日本ナショナルトラスト、1993年3月号）、上野和男「波照間島の祖先祭祀と農耕儀礼―ムシャーマ行事を中心とする盆行事の考察―」『国立歴史民俗博物館研究報告 第66集』（国立歴史民俗博物館、1996年）、佐藤有「仮面の空間 ： 悪石島・ボゼ祭りを事例に」「神戸文化人類学研究1」（神戸大学、2007年）、「ナマハゲ 草食化 片手間の新世代、騒がず脅さず」（朝日新聞2010年2月12日）、「ナマハゲが優しくなって宿題の面倒まで見てくれる」（NEWS ポストセブン、2016年11月7日）、青山十也「七浦に伝わる伝統アマメハギ」『金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書 33巻』（金沢大学、2018年）、石川直樹『まれびと』（小学館、2019年）今林直樹「宮古島のパーントゥ」『沖縄研究ノート 29号』（宮城学院女子大学、2020年）、平辰彦『来訪神辞典』（新紀元社、2020 年）、豊後高田市教育委員会文化財室監修『天念寺修正鬼会の世界』（長岩屋修正鬼会保存会、2021年）、
文化庁運営「文化遺産オンライン」https://bunka.nii.ac.jp/index.php、おおいた遺産活性化委員会運営「ケベス祭」http://oitaisan.com/heritage/ ケベス祭 /、豊後高田市運営 日本遺産『鬼が仏になった里「くにさき」』https://www.city.bungotakada.oita.jp/page/page_04211.html、遊佐町運営「国指定重要無形民俗文化財 遊佐の小正月行事（アマハゲ）」http://www.town.yuza.yamagata.jp/ou/kyoiku/bunka/8207.html、大船渡市運営「吉浜のスネカ」https://www.city.ofunato.iwate.jp/soshiki/kyoikusoumu/1931.html、能代伝統文化活性化実行委員会「能代のナゴメハギ」http://bunka.welcomenoshiro.com/culture/noshirononagomehagi/、男鹿市運営「男鹿のナマハゲ」https://www.namahage-oga.akita.jp/